



オアシス

文責：副学長
桑原雅次

出雲芸術アカデミーだより 2021年1月20日発行 第33号

令和3年（2021年）が始まりました。今年の干支は[丑]（うし）年です。丑年生まれの方は、「努力家でマイペース」といわれているそうです。他の意見に惑わされることなく、自分のペースで突き進んでいけるような年になるといいですね…。

昨年から今年にかけては、例年にないコロナ禍の関係で、特に年末年始は巣籠りを決めていました。昨年末から「LPレコード」にはまり、自宅でも微力ながら環境を整えていました。私の若いころは、音源といえば主流はレコードでした。そのレコードは、長い間眠っていたのですが、この度、丁寧に手入れをし復活させたところです。面倒な手間はかかりますが、時代を超えた豊かな響きに満足したところです…。

◎ アウトリーチ事業を実施しました！

今年度のアウトリーチ事業（音楽と音楽家の出前事業）は、コロナ禍において実施が危ぶまれました。検討を重ねた結果、出前先を縮小し学校関係に限定させていただきました。演奏する側は5つのグループを編成し、小学校5校と教育支援施設1か所を計画訪問し、残すところ1施設となりました。アンサンブル編成は、①<トランペット・トロンボーン・ピアノ>②<チェロ・コントラバス・ピアノ>③<打楽器>④<木管四重奏>⑤<声楽・ピアノ>で、各施設で生演奏の素晴らしさを体感していただけたことと思います。

その様子は各施設からのアンケートで感じ取ることができますので、一部を紹介します。

・今回のように学年を限定しての演奏会は、児童の発達段階に合った選曲内容だったので、集中して鑑賞することができたように感じます。継続して来年もこのような鑑賞会が実施されると喜びます。

・子どもたちの反応は、「レベルが違った」「本物のほうがCDより心を動かされた」「いい声の出し方がわかった」といった感想が多くみられました。

・45分を3、4年生の実態を考えてプログラミングしてもらえて、児童を引き付け演奏してもらえて大変良かったと感謝しております。

・コロナ禍で生の演奏に触れる機会が失われ残念な気持ちでいましたが、金管楽器ののびやかな音色が体育館いっぱいに広がるのを聞いた時、涙が出そうになりました。

・いろいろ楽器紹介等も工夫していただき、子どもたちも楽しんで聞いていたと思います。「手をつなごう」を歌う時に4年生の歌声がいつもより弱かったので聞いてみると、「歌うと楽器の音がきこえなくなるから、小さい声で歌っ



裏面へ

た」と言っていました。なるほど！！楽器の音色に耳をすまそうとする心に納得しました。

・プロの方の素晴らしい生演奏を聴く機会を設けていただき、本当に感謝しております。私自身も初めて知る打楽器ばかりでとても勉強になりました。「タンバリン」「トライアングル」等、子ども達の身近な楽器でも、様々な演奏の仕方、表現の仕方ですばらしい演奏になることを知り、子ども達も興味津々でした。色々な音がする打楽器にとっても興味を持っていたので、最後には貴重な楽器を触らせていただき、実際に音を鳴らすことで打楽器の魅力を感じることができたと思います。

本当にありがとうございました。

◎ オペラ講座が開催される！

作曲家平野一郎氏を迎え、オペラに関する特別講座が先般開催されました。平野氏といえば、「出雲の春音楽祭」を主催している出雲市芸術文化振興財団が連作交響神楽を委嘱している作曲家です。これまでに、第1番から第5番までがご当地出雲で初演されています。残すところ「間奏曲」と第6番「国譲」が、この出雲の地で初演の予定です。

その作曲家平野氏にオペラについての特別講演をしていただきました。また、今年3月の「出雲の春音楽祭2021」は、オペラ「カヴァレリア・ルスティカーナ」の作曲者、マスカーニの初版譜が発見され、中井芸術監督が研究中のオリジナル譜を世界初演する予定です。そうした中で、平野氏も丁度5幕からなるオペラを作曲中ということもあり、オペラについてももう一度原点に戻り、学び直しを試みる研修となりました。

今回は、前編として、オペラがどの様にして始まったのかを当時の楽譜や音源、映像を通して懇切丁寧に講義をしていただきました。オペラの起源は、16世紀最末期のフィレンツェで誕生した音楽劇と言われています。人類最初のオペラが誕生したのち、バロックの時代になるとオペラはローマやヴェネチアでも盛んに上演されるようになります。この時代を代表する作曲家がクラウディオ・モンテヴェルディ（1567-1643）であり、オペラの基礎を築く重要な役割を果たしたことを平野氏は資料を駆使しながら説明していただきました。当時の楽譜を紹介されましたが、現代のものと違い見慣れず、読み取りにとても苦労しました。また、初期のアカペラの5声からなるアンサンブルは、とても繊細かつ柔軟でありながら全体のまとまりの正確さに驚かされました。時代の経過とともに通奏低音が入るようになり、基準音が常にあるため柔軟さの代わりに細部にわたって綿密さが増し、豊かな表現力が得られるようになってきた様子が、私なりに理解できたような気がします…。そのような過程を経ながら、オペラの内容も歴史的な題材や悲劇だけでなく、同時代の人々が巻き起こす喜劇が次第に隆盛を極めるようになり、そして、モーツァルトの時代へ受け継がれていく過程を学ぶことができました。

前編では、オペラの起源に関わる内容でしたので、モーツァルト以後のオペラしか耳にしていない私にとっては難しい面もありました。しかし、平野氏が準備された資料はとてもレベルの高い芸術性の優れた音源でしたので、大ホールの空間にマッチした心地良い時間を過ごすことができました。後編が今から楽しみです！



【このたよりは、本アカデミーホームページでも掲載します <https://www.izumo-zaidan.jp/academy/>】